

## 「ドゥンガン人に関する国際集会」に参加して

山崎 典子

2010年10月16日に東京外国語大学において、中央アジアのドゥンガン人（漢語では東干人）の言語や社会をテーマとして「ドゥンガン人に関する国際集会」が開催された。集会は3部構成で、クルグズスタンとウズベキスタンから招聘されたドゥンガン人学者4名と日本側の言語学者2名による興味深い報告をめぐり、参加者との間で活発な議論がなされた。使用言語はロシア語、日本語、ウズベク語（通訳付）で、参加者には当日の報告予定内容をロシア語と日本語で詳細にまとめた冊子が配布された。プログラムは以下の通りである。

### 【プログラム】

#### 第1部（13：00-15：00）

開会（菅野裕臣）

Имазов Мухаме Хусезович イマーゾフ・ムハメ・フセゾヴィチ（クルグズ共和国国家科学アカデミー・ドゥンガン学・中国学センター長）

《《Дунгановедение в Кыргызстане》》「クルグズスタンのドゥンガン研究」

《《Язык и литература центральноазиатских дунган》》「中央アジア・ドゥンガン人の言語と文学」

Юсупов Рашид Умарович ユスーポフ・ラシド・ウマーロヴィチ（ビシュケク人文大学世界経済講座長、雑誌『ドゥンガン人』編集長、ドゥンガン文化・教育社会財団議長）

《《Хозяйственная и торгово-предпринимательская деятельность дунган Центральной Азии: история и современность》》「中央アジア・ドゥンガン人の経済＝商業・企業活動：歴史と現在」

《《Среднеазиатские дунгане вчера и сегодня. Общие сведения о дунганской диаспоре》》「中央アジア・ドゥンガン人の過去と現在. ドゥンガン・ディアスポラの概要」

#### 第2部（15：05-16：30）

Джон Али Алиевич ジョン・アリ・アリエヴィチ（クルグズ共和国国家科学アカデミー・

ドゥンガン学・中国学センター上級研究員)

《《Этнографические сведения о дунганах СНГ》》「独立国家共同体のドゥンガン人に関する民族学的データ」

Совуров Мане Давурович ソヴーロフ・マネ・ダヴーロヴィチ (ウズベキスタン・ドゥンガン人文化センター議長)

《《Этнографические очерки дунган Узбекистана》》「ウズベキスタン・ドゥンガン人の民族学的概況」

第3部 (16 : 35-18 : 10)

劉勳寧 (明海大学) Лю Сюньнин / Liu Xunning

《《Презентация о дунганском языке》》「ドゥンガン語に関するプレゼンテーション」

池田寿美子 (金沢市) Икэда Сумико

《《Язык и общественная жизнь дунган в Узбекистане》》「ウズベキスタンにおけるドゥンガン人の言語と社会生活」

閉会 (菅原睦)

【集会の概要】

日本におけるドゥンガン研究は、著名な言語学者であった故・橋本萬太郎氏の研究を嚆矢とするが、橋本氏の逝去後、中央アジアのドゥンガン人が学术界の注目を集めることはほとんどなかったと言える。しかし、橋本氏の研究に影響を受けた菅野裕臣氏をはじめとする言語学者たちは、ドゥンガン語の調査研究やドゥンガン人学者との交流を1990年代頃から脈々と続けてきた。今回、ドゥンガン人に関する日本で初めての学術的会合を実現した彼らの長年の取り組みは、高く評価されるべきだろう。

この国際集会は、菅野氏が代表者を務める2010年度の科学研究費基盤研究C「中央アジアの多言語状況の調査研究—主としてウズベキスタンとクルグズスタンの場合—」の一環として行われた。そのこともあってか、日本側の参加者30名のうち半数以上は言語学者であったが、言語学以外にも、文化人類学、中央アジア史、中国史、中国文学など多分野にわたる研究者が参加していた。かくいう筆者自身は中国 Muslims の近現代史を研究している。19世紀後半から20世紀にかけて中央アジアに流入した中国 Muslims の末裔であるドゥンガン人に、かねてから強い関心を抱いてきたのは、彼らが歩んできた歴史が「民族とは何か」という大きな問いを考える上で示唆に富むものであるからに他ならない。

参加者のドゥンガン研究への期待の高さは、菅野氏による開会の挨拶に対する大きな拍手に表れていた。やや昂揚した雰囲気の中で始まった第1部では、クルグズスタンのドゥンガン人の言語や経済活動について、現地のドゥンガン人学者2名による報告がなされた。イマ

ーゾフ氏は報告の中で、中国西北地域（主に甘粛と陝西）の方言を基礎としながらアラビア語、ペルシア語の語彙を多く含み、現在はキリル文字で表記されるダウンガン語の特異性（孤立語の中では唯一の音声表記言語であるという）を説明し、その言語資料としての価値を強調した。また、彼は話の流れで、「ダウンガン人」というのはあくまでも他称にすぎず、自称は「回民」「回族」であると手短かに述べた。ダウンガン人のアイデンティティを規定する大きな要素の一つであるに違いない、民族の自称と他称というこの問題について、より詳しい話があったならば報告にさらに深みが増しただろうと個人的には思う。次に、帝政ロシア時代から現在までのダウンガン人の経済活動の変遷に関するユサーポフ氏の報告の中では、ダウンガン人が中央アジアの地に米や野菜の栽培法をもたらしたことや、彼らがホルホーズの一員として綿花栽培において優れた業績を挙げていたことが述べられた。こうした事柄は既にロシアや日本の研究者にも指摘されているが、より興味深く感じられたのは、1972年にソ連政府が禁止するまで彼らがケシ栽培を続けていたという話である。これは筆者の憶測であるが、中国西北のムスリム社会で20世紀前半までケシ栽培がさかんに行われていたこと、ダウンガン人の居住地がアフガニスタンを拠点として中東やヨーロッパに至るアヘン密売ルートと重なることなども、何らかの関係があるのかもしれない。

第2部の報告では、現在のダウンガン人の生活に関する具体的な話が多く、参加者はいずれも集中して聞いていた様子であった。まず、クルグズスタン出身のジョン氏が地図を用いて、1870年代の中国における西北ムスリム反乱に対する清朝の鎮圧を受けた後、ダウンガン人が中国から中央アジアへ移住した経路を3通り説明した。その次に、ダウンガン人の日常生活を映したビデオが流され、中国文化を土台としながらも、イスラームや周辺の諸民族の文化の影響を受けているという彼らの豊かな生活文化が紹介された。例えば、ビデオの中でも紹介され、参加者からの質問も出されたダウンガン人の伝統的な婚礼は、中国式であると同時にイスラームの教えに則ったものでもあるが、花嫁衣装のデザインは満洲人のものに近いという。また、イスラームでは通常偶像崇拜として禁止される、人間の顔や動物などのシンボルが、衣装の模様として入ることもあるらしい。彼らの食事風景に関して言えば、ブロフやナンなど中央アジアの食べ物の他に、麻花（主に中国華北地域で食される揚げ菓子）や箸など、中国の食文化を彷彿とさせるものが少なからず見られたのが印象的であった。次の報告者のサヴァーロフ氏は、今回来日した4名のダウンガン人学者の中で、唯一ウズベキスタンの出身である。ウズベキスタンのダウンガン人は、1877年頃に甘粛から中央アジアに移住し、後にクルグズスタン西部のウズベキスタンとの国境の町オシュを通過して、ウズベキスタン各地に定住したグループだという。サヴァーロフ氏の報告は、ウズベキスタンのダウンガン人社会においてエスニックな背景や出身地、宗派の違いがあることを明らかにしたが、これはカザフスタンやクルグズスタンのダウンガン人についても言えることだろう。例

えば、ドゥンガン人は現在中国で回族と呼ばれている人々の子孫であるとされることが多いが、実際にはバオアン人（中国では保安族と呼ばれる）、ドンシアン人（東郷族）、サラール人（撒拉族）に起源を持つ人々もいるという。ドゥンガン人のイスラーム信仰については、中国ムスリムと同様スンニ派ハナフィー学派を主とし、「旧教」と「新教」の違いがあること、ジャフリーヤなどのスーフィー教団が活動していることなどが説明された。宗教儀式の行い方により区別されるという「ヤフシ」と「ヤマン」のグループについては、会場から質問が出された。第2部で最も印象的だったのは、サヴェーロフ氏の報告に対してジョン氏が、ドゥンガン人には民族的な記憶はあってもその言語を伝える人がいないと述べたときに、両国のドゥンガン人学者が皆深く頷いていたことである。彼らのドゥンガン語の将来に対するこのような危機意識は、今回の集会全体を通して感じられたものであり、彼らが日本におけるドゥンガン研究の進展に期待をかけている理由の一つでもあるのだ（このことに関しては後ほど詳しく述べる）。

第3部では、日本側の報告者2名がそれぞれの問題関心からドゥンガン語について論じた。まず、劉勳寧氏が中国語方言学の立場から、第1部での報告者であり作家でもあるイマーゾフ氏の詩“Амади шу”（漢語で阿媽的手，ピンインはAma de shou）について、ドゥンガン語研究者の林濤氏がつけた漢字とドゥンガン語の表記を比較して論じてみせた。中国西北地域の諸方言の話し手でもある劉氏にとっては、甘肅方言や陝西方言を話すドゥンガン人とはほとんどの場面において意思疎通が可能であるという。また、参加者のリクエストにより、イマーゾフ氏がドゥンガン語の甘肅方言で、サヴェーロフ氏が陝西方言で“Амади шу”をそれぞれ朗読し、会場を沸かせた。続いて、池田寿美子氏が、現代ウズベキスタンにおける言語問題への関心から、ウズベキスタンのドゥンガン語について社会言語学的な考察を行った。その報告によれば、多民族・多言語国家のウズベキスタンでは、1989年に制定された国家語法によって公的な場における共通言語がウズベク語となり、ドゥンガン人などの言語的マイノリティに新たな言語環境を生み出した。つまり、母語であるドゥンガン語の使用が制限され、ドゥンガン人同士の間でもウズベク語やロシア語が共通言語（池田氏によれば「優勢言語」）となったことで、ドゥンガン語の話者数及び「純粋なドゥンガン語」による会話が著しく減少しているのだという。だが、筆者はこの指摘に違和感を覚えた。というのも、その他の旧ソ連少数民族の事例から推察するに、ドゥンガン語の喪失やドゥンガン人によるウズベク語及びロシア語の使用はソ連時代、国家語法制定よりはるか前から進行していたはずであるからだ。そもそも、「純粋な」民族言語というものが存在しうるのかという問題もある。池田氏は続いて、民族言語の喪失という厳しい現実と直面しているドゥンガン人がドゥンガン語の擁護と発展を図るためには、彼ら自身が、国際的に認められているマイノリティの言語権を行使すべきであると発言した。それに対して、サヴェーロフ氏は、中央アジア諸国の

ドゥンガン人が協力してドゥンガン語の標準語をつくることを熱く主張した。すると、イマーゾフ氏がドゥンガン語には既に甘肅方言を基礎とした標準語があると反論し、陝西方言のドゥンガン語を話すサヴェーロフ氏との間で意見が対立する場面があった。この議論の応酬を聞きながら、ドゥンガン語の将来に対する彼らの切迫した危機感を改めて突きつけられた思いがしたのは、筆者だけではあるまい。結果としては、中央アジアにおける民族的・言語的マイノリティであるドゥンガン人が、押し寄せるグローバリゼーションの波の中でドゥンガン語を維持していくためには、方言の優劣をめぐって対立すべきではないということで、両者の意見はとりあえずの一致を見た。ドゥンガン人学者たちは、両方言を参考にしながら良質の辞書をつくること（ただし、辞書編纂の際には甘肅方言を基礎とするべきであると再びイマーゾフ氏が発言したことに対し、サヴェーロフ氏は不満げであった）、そして彼らの言語文化の維持と発展には経済大国である日本の協力を得ることが必要であると、力強く語った。それに応えて、ある参加者からは、ドゥンガン語の統一とドゥンガン人の結束のために、日本の言語学者として何か手助けをしたいという声も寄せられた。

菅原睦氏によるウズベク語での閉会の挨拶の後、東京外国語大学内の別会場で行われた懇親会でも、ドゥンガン人学者たちは、日本の今後のドゥンガン研究の進展に大いに期待をかけ、日本の研究者の訪問を心から待ち望んでいると繰り返し述べた。なお、後日、菅野氏から集会の概要のほか、ドゥンガン人学者からの土産としてクルグズスタンの帽子（カルパック）が送られてきた。菅野氏によれば彼らは心から日本滞在を楽しみ、今回の国際集会を組織し参加した全ての人々に深く感謝していたという。

#### 【今後の展望】

今回の集会に関して残念に思われる点があったとすれば、それは、数多くのドゥンガン語資料が会場後方の机の上に置かれていたにもかかわらず（休憩時間に手にとって見ることはできたものの）、それらが詳しく紹介される機会がなかったことである。展示されていたドゥンガン語の学校教科書や新聞 Хуеймин бо（『回民報』, huiminbao）、Я. Шиваза（十娃子, shiwazi）など著名な作家の作品集、歴史学者 М. Сушанло（蘇尚洛, sushangluo）の著作、順口溜（民間で流行している韻文）や民話に関する書籍は、ドゥンガン人の言語、歴史、文化を伝える貴重な資料であると同時に、日本では入手が極めて困難なものばかりであっただけに、惜しまれてならない。今後日本においてドゥンガン研究の定着を目指すには、こうした資料の価値を見極めた上で、必要な資料を収集し、研究者がそれらを利用できるような環境を整えていくことが、課題の一つとなるだろう。

さらに、それ以前に取り組むべき課題として、第一に、日本国内でドゥンガン研究会を立ち上げ情報交換や学術交流を盛んにすることが挙げられる。おそらく研究会は言語学者を中

心に組織されることになるだろうが、幅広いアプローチからダウンガン研究を推進するためには、他分野の研究者も積極的に参加すべきだろう。第二に、今回来日したダウンガン人学者との交流を維持すると同時に、諸外国のダウンガン研究機関やダウンガン研究者とも関係を構築することである。ロシアやドイツにはダウンガン研究の蓄積があるというが、日本の研究者にとってアクセスがより容易なのは、中国の中央民族大学に1999年に設立された東干学研究所（ダウンガン学研究所）だろう。創設者の胡振華氏は故・橋本萬太郎氏とも親交があり、その教え子である丁宏氏や海峰氏も優れた研究業績を挙げている。同大学には、ダウンガン研究に有用な資料も多く所蔵されている。また、中国育ちの白系ロシア人でオーストラリア国立大学教授の Svetlana Rimsky-Korsakoff Dyer 氏が、2007年にベルギーのリュウベン・カトリック大学フェルビースト研究所に寄贈した、一連のダウンガン研究蔵書も積極的に利用していくべきである。中国ムスリム研究の立場から言えば、中央アジアのダウンガン人コミュニティに保存されているという、小児錦（アラビア語表記の漢語資料）の学術的価値にも注目したい。ただし、海外の研究者との交流や資料収集を効率よく行うためには、第一の課題として述べたように、まずは日本国内で研究会を設立し研究体制を整えていく必要がある。

このように、今後取り組むべき課題は多くあるものの、日本における第一回目のダウンガン研究の集会は、ダウンガン研究の豊かな可能性を我々に感じさせてくれるものであった。筆者自身、2011年に中央アジアのダウンガン人コミュニティにおいて調査を行う予定であり、日本におけるダウンガン研究の進展に何らかの貢献をしたいと願っている。

（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程）